

# 陸 羯南（くが・かつなん）

## 1、プロフィール

新聞「日本」を主宰、条約改正のための欧化主義に反対の論陣を張り、国民の精神的統合としての国家を説く。その民族文化の再認識は、正岡子規の登用にもうかがえる。

<生没>

1857(安政4)年 10月 14日 ~ 1907(明治 40)年9月2日

<代表作>

評論『近時政論考』『原政及国際論』

<青森との関わり>

弘前・在府町(現弘前市)生まれ。司法省法学校を退校ののち青森新聞社に勤める。

## 2、作家解説

中田氏、幼名巳之太郎、のち実と改める。少年時、古川他山の塾で漢学を学ぶ。東奥義塾、宮城師範学校、司法省法学校に入るがそれぞれ中退。明治 12 年法学校において賄征伐の処罰に関して学校側と対立、原敬らとともに退校処分を受ける。この年、弘前に戻り、陸に改姓。青森新聞の編集責任者となる。明治 13 年4月県政批判による筆禍のため罰金を受ける。9月青森新聞社退職。渡道し紋別精糖所に勤める。この間の非運を詠った漢詩集に「寒帆余影」がある。明治 16 年太政官文書局を皮切りに、21 年内閣官報局編輯課長を辞任するまで、明治政府に勤める。

同年、新聞「東京電報」を興す(主筆兼社長)。22 年これを廃刊、新聞「日本」を興す(主筆兼社長)。外相大隈重信の条約改正案をスクープするなど、条約改正案反対運動の先頭を切って、しばしば発行停止を受ける。23 年「自由主義如何」、

「近時政論考」を同紙に連載。26年『原政及国際論』出版。29年、新聞紙条例反対運動を起こし、30年社会問題研究会評議員となる。

38年、肺結核により鎌倉に静養、翌39年「日本」を伊藤欽亮に譲った。年末日本新聞社社員22名が退社、その内の9名が移った政教社の雑誌「日本人」は明治40年1月から「日本及日本人」と改題される。同年9月、鎌倉極楽寺において死去。

明治20年代、国民に知られぬままに進められた条約改正を契機として、言論界は、欧化主義と国民主義に二分される情勢にあつて、羯南の立場は後者を代表するものであり、日本の近代化、国際化の過程に、主体性を確保し、国家を国民の統合としての精神的共同体とすることを目指したのである。

### 3、資料紹介

#### ○『羯南文集』

図書

1910(明治43)年11月11日

225mm×155mm

梶井盛の編集により、羯南の死後に刊行されたもの。新聞「日本」に掲載された重要時事問題に関する論文を主とし、評林、諷叢、紀行文、雑録等の時代思潮の一斑を知ることができるものも一部収録している。